

# 通信



日 仏 東 洋 学 会

## 日 仏 東 洋 学 会

### 事 務 局

〒162 東京都新宿区戸山 1-24-1 早稲田大学文学部  
福井文雅研究室 Tel. 03.203.4141.

### 通信編集委員（五十音順）

興 膳 宏， 高 田 時 雄， 中 谷 英 明， 羽 田 正，  
浜 田 正 美， 御 牧 克 己， 八 木 徹， 山 中 一 郎

### 入会申し込み・会費納入（年会費 3,000円）

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学東洋文化研究所  
羽田正まで Tel. 03.812.2111.

### 「通信」の記事

〒673 神戸市西区伊川谷 神戸学院大学教養部  
中谷英明まで Tel. 078.974.1551.

---

目 次

第5回日仏シンポジウム開かれる . . . . .	1
第1部会『日・中宗教文化の交流』 . . . . .	1
第2部会『中央アジア諸言語写本』 . . . . .	6
第4回日仏学術セミナー『宗教とアジア社会』 . . . . .	14
フランス人学者の来日 . . . . .	14
M. SOYMIÉ - G. FUSSMAN	
会員消息 . . . . .	15
会員の渡仏	
新入会員・その他	
昭和63年度会員総会報告 . . . . .	15
編集後記 . . . . .	17

---

# 第5回日仏シンポジウム 開かれる

## 東京と京都で2部会

日仏会館とCNRS（国立科学研究センター）との協定に基づき、1976年以来、3年毎に日仏交互に会場を設けて開催されている日仏学術シンポジウム（Colloque Scientifique Franco-Japonais）は、昨秋フランス代表団を日本に迎えて、その第5回目が行われた。このシンポジウムに日仏東洋学会は、『通信』前号に既報のごとく、『日・中宗教文化の交流』、および『中央アジア諸言語文書』という2部会を組織して参加した。1部門からの2部会参加は前例の無いこと。日仏学術交流における東洋学の重要性を改めて示すこととなった。今回参加したのは、下記の10部会である。

- 1° 数学 「解析的整数論」
- 2° 化学 「光化学の最近の進歩と技術的応用」
- 3° 地理学 「農村の非農業化に関する日仏の比較地理学的研究」
- 4° 海洋学 「1.温排水 2.養殖 3.リモートセンシング」
- 5° 医学 「『癌』の画像医学」
- 6° 法学 「紛争解決の機構と問題点」
- 7° 経済学 「海外民間投資の比較検討」
- 8° 社会学 「教育と情報社会」
- 9° 東洋学Ⅰ 「日・中宗教文化の交流」
- 10° 東洋学Ⅱ 「中央アジア諸言語写本」

シンポジウムは、10月3日の東京日仏会館における合同開会式に始まり、翌4日から、部会別の討論に入った。東洋学の2部会における発表（第1部会14件、第2部会21件）は、以下にその梗概を紹介する。全部会の概要は、日仏会館発行の『日仏文化』52号、1989年9月号を参照されたい。

10月13日、日仏会館で行われた合同閉会式では、多数の参加者の中から、我が東洋学部門のL. Bazin

氏が、日仏会館館長に赴任早々のH. J. Ceccaldi氏とともに記念講演を行った。演題は、“Les Turcs et le Bouddhisme du VI<sup>e</sup> siècle au VII<sup>e</sup>”。講演の同時通訳に当たった浜田正美氏による訳「六―八世紀のテュルク人と仏教」が、『東洋学』第七十八輯、平成元年七月、に掲載されている。

なお閉会式当日の反省会（Evaluation）においては、各部会の代表者によって、シンポジウムの持っている意義の大きさが繰り返し強調され、将来の継続と発展を計ることが確認されたことを付記する。

## 第1部会

### 『日・中宗教文化の交流』

報告 山田利明

第5回日仏コロックの主旨や開催方法については、既に本通信紙上で周知されていることと思われるので、ここでは省略し、記録のために第一部会の概要とその日程等を記しておく。敬称等は全て略した。なお『東洋の思想と宗教』第六号（早稲田大学東洋哲学会・1989）に、福井文雅教授による当部会の報告があるので参照されたい。

#### 〔経過〕

東洋学第1部会が上のようなテーマのもとに開催されたのは、前回のパリでのコロックに参加した研究者を中心として、中国宗教に関する会議を今回も行いたい、という希望が出されたためである。しかし、前回と同一のテーマで行うには、前回の成果が大きかっただけに躊躇され、むしろ前回の内容を発展させるべく、しかも単一の宗教をテーマとするのではなく、中国宗教をトータルな観点から考えてみようとする姿勢から出たテーマであった。

1986年秋、日仏会館より関連諸学会に第五回日仏コロック開催の提示があった時点で、前回の参加者が集まり準備会が構成された。日本側の代表者を酒井忠夫（筑波大名誉教授）、責任者を福井文雅（早大教授）とし、前回のフランス側責任者クリストファー・シペールKristofer Schipper（フランス国立高等研究院教授）に、「日・中宗教文化の交流」を

テーマとする会議開催の通知を行い、フランス側参加者を組織するよう依頼したのである。シベール教授からは、折り返しコロック参加の意思表明と、フランス側参加者の名簿が送られてきた。(後に日本側からの要望で、参加者に若干の異動があった。)これを承けて、日本側の準備会が正式に発足し、表記テーマによる日仏コロックへの参加を日仏会館に申し入れた。

一方、同じ本学会の中から、京都において「中央アジア諸言語文書」をテーマとする会議開催の申し込みがあり、テーマと参加者が全く別であることによって、前者を東洋学第一部会、後者を東洋学第二部会として別々に会議を開催することとなった。これによって、先の準備会は「日仏コロック東洋学第一部会」へと発展し、実質的、具体的な準備活動に入ったのである。

第一部会の準備活動の中で、最初に問題となったのは、この部会をどのくらいの範囲とするか、という枠組みについてであった。日本と中国の宗教文化の交流をテーマとするわけであるから必然的にそこには日本の民族学者や仏教学者、神道学者の参加が求められ、中国学の分野においても、中国仏教や道教だけではなく、儒教、民間信仰、文学等の幅広い研究者の参加が求められる。しかし、こうした広範な分野の研究者が個々別々の発表をしたのでは収拾がつかなくなる可能性がある。この問題を解決するために、代表者酒井教授は、コロック参加者による月例の研究会を主宰し、その中で成果をコロックで提示する、という方向をうち出した。

これは、当初予想したよりはるかに規模の大きな会議になる。そのための費用等をどのように得るのが最大の課題として浮上した。先ず考えられるのが公的機関からの助成である。これについては二つの方法が取られた。一は会議自体の準備のために、楠山春樹(早大教授)を代表とする文部省科学研究費—総合研究—B—の申請。一つは、酒井忠夫を代表とする三菱財団への助成申請である。この三菱財団の助成は、酒井教授の主催する研究会を運営するためのもので、コロック自体への助成ではない。従ってこの研究会の事務局が別に置かれ、石田憲司(国土館大講師)がこれに当たった。日仏会館関連学

会の間でも日仏コロックのための文部省科学研究費組織が整えられ、福井教授がこれに参加した。幸いにもこれら全ての機関からの助成を受けることが出来たが、予定された会議の規模から考えると、なお少なからぬ金額が不足した。そこで、有力寺社、企業、個人からの寄付を求め、その不足を補うこととし、八七年秋からその募金活動が行われた。

このような資金上の問題とは別に、会場や会期の設定、発表者等との連絡など会議自体の計画や準備にも努力がはらわれた。特に会場の設定には様々なプランが出されたが、結局、東京近郊のホテルあるいはセミナーなどを使用して合宿形式で行うこととし、その条件に合う会場探しも、大きな仕事となった。八七年九月から十月にかけて、日本側発表者、発表題などがほぼ固定化し、さらに会期、会場についても下記のような決定をみた。

会期 一九八八年十月四日夕刻～七日  
(但し、四日、八日は移動日)  
会場 伊東市郊外「セミナーハウス一碧」  
(朝日生命研修所)  
調査 長崎市内中国寺廟の調査と「おくんち」の見学。帰路京都一泊。日仏東洋学会関西部会会員と交流、また、関西の社寺拝観。  
レセプション 十月三日、国際文化会館

後に、長崎への調査旅行は滞在日程の都合や昭和天皇の御不例による「おくんち」の中止によって変更され、従って、京都行きも廃止されたが、他の計画はほぼこのまま実行された。ただ一つの誤算は、当初、「セミナーハウス一碧」だけを会場と宿舎として使用する予定であったのが、参加者が多数にのぼるため、急遽近隣の宿泊施設をも借り切って使わねばならなくなったことであった。

八八年にはいと、酒井教授主宰の研究会が開かれ、異なった分野の研究者の意見や資料の交換など、きわめて活発な研究活動が続けられた。そこには桜井徳太郎(駒沢大教授)、平井直房(國學院大学教授)、宮本袈裟雄(武蔵大教授)、宮田登(筑波大教授)など仏教民族学や神道の専門家が招かれた。また、会議の諸準備に関しては、福井教授を中心とする事務局がこれに当たった。対論者・司会等の最

終決定、プログラム・案内状等の準備と発送、宿泊者の確認、諸機関との連絡等これらはすべて事務局において行われた。

これらの他に、東洋学第一部会の会議とは直接関わらないが、日仏コロック会期中の関連活動として、レオン・ヴァンデルメルシュ（国立高等研究院教授）と福井教授・田中文雄（大正大講師）は、日本中国学会大会（於大正大学）においてシンポジウム「中国学の未来像」のパネラー・司会等として参加。ヴァンデルメルシュ教授はさらに仏教大学仏教会において「いわゆる文言文の特性」（日本語）について講演、シペール教授も東洋大学東洋学研究所において、「フランス道教学の現状」について講演、等の日程が盛り込まれた。

このように、学術的、物質的な諸準備が続けられ、十月三日のコロック開会へと進んだわけであるが、それらの準備に関しては、前田繁樹（第一部会幹事・当時早大助手）を中心とする事務局の活躍に負うところが大きい。殊に八月以降、夏休み返上で準備に当たった事務局員の努力については、ここに特に記して、その労に感謝する次第である。

以上、いささかの自賛を含めて、三年に及ぶ当部会の経過を記した。記録の意味を含めて、準備会からの委員を記しておく。

〔第五回日仏コロック参加準備会〕（八七年三月まで。五十音順）

金岡照光・京戸慈光・興膳宏・酒井忠夫・坂出祥伸・広川堯敏・高橋稔・田中文雄・福井文雅・前田繁樹・山田利明

〔東洋学第一部会委員〕（八七年四月より）

榎一雄・金岡照光・神田信夫・狩野直禎・楠山春樹・酒井忠夫・坂出祥伸・高橋稔・中村璋八・福井文雅・山本達郎

（幹事）田中文雄・前田繁樹・山田利明

〔事務局〕

岩崎日出男・垣内景子・齊藤明美・二階堂善弘・明神洋・森由利亜・山田均・吉田敏行・流王法子・テレアヌ＝フローリン

〔協力者〕

石田憲司・京戸慈光・齊藤襄治・増尾伸一郎・松本浩一・遊佐昇

〔第一部会会議〕

会期 一九八八年十月四日～七日

会場 伊東市郊外一碧湖畔 朝日生命研修所  
「セミナーハウス一碧」及び東販研修所「トールいっぺき」

五日午前開始の会議に備えて、フランス側参加者と日本側参加者の一部が貸切りバスで四日の午前中に国際文化会館を出発。事務局も同日午後現地に集合。同日夕刻にはほとんどの参加者が出席して、第一部会の開会式と打ち合せ会が開かれた。席上、日仏東洋学会を代表して榎会長が歓迎の辞を、酒井代表が開会の辞を述べ、シペール教授の謝辞が応酬された。以下、会議の内容を日程順に記しておく。尚、開会式から会議の全期間を通じて、福井教授が総司会、山田が同補助を務めた。

発表者と発表題目	対論者	議長
10月5日（水）		
9.45-11.00〔基調報告1〕		
①B.Frank「絵札のお札」（日本語、スライド付き）	白戸わか 京戸慈光	秋山光和
11.30-12.30〔基調報告2〕		
②酒井忠夫「中国宗教文化（符呪文化）の日本への影響」（英文）	K.Schipper, 中村璋八	榎一雄
14.00-15.00		
③坂出祥伸・増尾伸一郎「中世神道と道教」（中文と日文）	B.Frank 酒井忠夫 菅原信海	狩野直禎
15.00-16.00		
④中村璋八「陰陽道の史的展開」（中文と日本語）	遠藤克彦 宮本製袋雄 増尾伸一郎	坂出祥伸

16.30-17.30	⑤L.Vandermeersch「儒教・道教の思想交渉上における玄学」(日本語)	栗原圭介 I. de la Guéronnière 館野正美	楠山春樹	16.30-17.30	⑬K.Schipper「靈宝科儀的形成」(英文)	高橋稔 小林正美 C.Mollier 山田利明	I. de la Guéronnière
-------------	--	--------------------------------------	------	-------------	--------------------------	----------------------------------	----------------------

10月6日(木)

9.30-11.20	⑥三崎良周「中国・日本の密教における道教的要素」(ロバール氏全文通訳)	J.-N.Robert 成瀬隆純 田中文雄	金岡照光
------------	-------------------------------------	-----------------------------	------

11.30-12.30	⑦J.-N.Robert「佛教の論義について」(日本語)	白戸わか H.Durt 福井文雅	B.Frank
-------------	------------------------------	------------------------	---------

14.00-15.00	⑧C.Mollier「洞淵神呪經の儀礼の伝統」(英文)	宮沢正順 石田秀実 松本浩一	山田利明
-------------	-----------------------------	----------------------	------

15.00-16.00	⑨I.de la Guéronnière「明代迄の道教文献に見える太極の概念の位置づけと意味」	L. Vandermeersch 石田秀実	福井文雅
-------------	---	--------------------------	------

10月7日(金)

9.30-11.00	⑩宮田登「日本民俗信仰に現われた符呪」	坂出祥神 廣川堯敏	酒井忠夫
------------	---------------------	--------------	------

11.30-12.30	⑪B.Berthier「福建省の神話とシャマニズム」(英文)	鄭慶歎 高橋稔	K.Schippeer
-------------	--------------------------------	------------	-------------

14.00-15.00	⑫C.G.-Vermande「ギメ美術館所蔵の中国儀礼絵画のコレクションについて」(英文)	狩野直禎 堀池信夫	L. Vandermeersch
-------------	---	--------------	------------------

15.00-16.00	⑬鄭慶歎「民間演劇に於ける王昭君: 民俗学上の新資料」(中国語)	B.Berthier 芦田孝昭	J.-N.Robert
-------------	----------------------------------	--------------------	-------------

会議の日程と発表者、対論者などは以上の如くである。その発表内容の二々について論ずるのは、紙幅の制限もあり、またあまりに専論に過ぎ、その内容も多岐に亘るので筆者一人のよくする所ではない。そこで詳論は予定されているプロシーディングスの刊行を俟って頂くとして、ここでは「日中宗教文化の交流」という観点から、二三の所感を記しておこう。

日本と中国の宗教文化の交流の原点を考えると、おそらくそれは、日本と中国の交通が開かれた時点にまで遡及する必要がある。それほど、古代の文化、文物と宗教は不離の関係にあった。しかも、「交流」とはいうものの、日本から中国への流入に関しては、近世以前において殆どその可能性を見い出せない。日・中の宗教文化の交流は、いわばその初期から、中国から日本へという一方通行的交流であって、日本から中国への還流作用が認められない。したがって、この場合の「日・中宗教文化の交流」とは、殆ど中国の宗教文化の日本への伝入・影響あるいは受容を意味する。そのばあい、「交流」とは、エクスチェンジではなく、日本国内におけるディヴロブメントと考えてよい。いまここでこの語にこだわったのは、思想・文物の伝来・流入の事実よりも、むしろそれが国内において、どのように受容され変容していったか、どの様に展開されたかを考える方が、はるかに困難な局面を持っているからである。

宗教や思想の伝来と定着は、数代に亘って重層的に影響を受けて、初めて成立し得る現象であり、その間の受容背景の変遷が大きく作用する。その点で、単なる言葉の借用と信仰乃至は宗教思想の影響とを同一視するわけにはいかない。いくら同じ言葉を使用しても、そこにその言葉の主体である信仰や思想が存在しない限り、これを影響と考えることはでき

ない。日本側発表者の立場は、こうした信仰や思想の存在に留意しつつ、日本の文献によって、中国仏教・道教などの宗教的影響を考えようとするもので、従来の日本宗教史の枠を超えた視点を示したといえる。例えば、三崎良周（早大教授）は、密教儀礼・信仰の中に散在する道教要素を指摘し、宮田登（筑波大教授）は、民族信仰の中に採り入れられた符や呪文を指摘することによって、宗教・信仰として流入し・定着した実例と、その信仰の実態を明らかにした。

日本の伝統的宗教である仏教・神道をこうした中国宗教との関連の中で考えようとする姿勢は、実は明治以降少なからぬ研究者によって手掛けられてきた。しかしながら、それらの研究は、必ずしも十全の成果を挙げたとはいえない。なぜなら、そうした研究の基盤となるべき中国宗教の研究が不十分であったこと、これらの研究が隣接する諸分野への外縁をもたなかったこと、などの理由が挙げられよう。換言すれば、日本仏教学や神道学と中国学・中国宗教学は、共通する基盤の上に立ちながらも、共通する研究を持たなかったというべきか。今回のコロックは、その意味では、この両者が共に一つの土俵を作り、その上に上がったという点でも注目されてよい会議となった。

こうした認識は日本人研究者のみならず、フランス側参加者にもあり、その研究が、「歴史や言語についての（欧米人研究者の）知識の欠落を補う」もので、将来的には大きなテーマとなるべきものとの考えを明らかにしている。ここで興味あることは、今回の東洋学第一部会のフランス側参加者が、中国学者と日本学者であったという点である。いまや二国間交渉史の分野は、当事国同士の研究ではなく、第三国がこれに加わったといえる。ベルナル・フランク（コレージュ・ド・フランス教授）「絵札のお札」、ジャン＝ノエル・ロベール（フランス国立科学研究センター研究員）「仏教の論義について」は、仏教という日・中共通の宗教文化の中から、その相異点を探ることによって、文化基盤の違いが明らかになることを示唆させるもので、今後の視点の拡大によっては、きわめて興味ある研究となる。シベール教授「靈宝科儀の形成」、ブリジット・ベル

チェ「福建省の神話とシャマニズム」もまた、視点を変化させることによって、日・中宗教文化交流史の上に重要な問題を提起する。前者は道教儀礼の形成が仏教儀礼にどう作用したか、それがまた日本の仏教儀礼にどのように展開されているのかを、後者は、中国の民間信仰・地方信仰の日本への伝来について、いずれも儀礼・信仰という宗教の主体に関わる問題を内在させている。

上記の日程を消化し、そこで行われた発表や討議を総括して東洋学第一部会は閉会したが、特にフランス側からは、今後もこのような共同の研究を続けて行きたい旨の発言があった。それが日仏コロックの場であるのか、あるいは違った形態を採るのか、未確定であるが、日仏双方がこうした学術交流の継続を希望していることだけは確かである。

#### 東洋学第一部会参加者

##### （日本側参加者）

秋山光和、芦田孝昭、伊藤聰、石井公成、石田憲司、石田秀実、今枝二郎、櫻一雄、遠藤克己、大久保良俊、岡崎由美、柿市里子、門屋温、金岡照光、狩野直禎、神田信夫、京戸慈光、楠山春樹、栗原圭介、小林正美、斎藤 治、坂出祥神、佐藤成順、沢井啓一、白戸わか、菅原信海、高橋稔、田中文雄、ユベール・デュルト、館野正美、中村璋八、成瀬隆純、平井有慶、廣川堯敏、福井文雅、堀池信夫、前田繁樹、増尾伸一郎、松本浩一、三崎良周、宮本袈裟雄、宮田登、宮沢正順、村山郁子、山田利明、遊佐昇、その他、大学院生

##### （フランス側参加者）

Mme Brigitte Berthier（国立科学研究センター研究員）、M. Bernard Frank（コレージュ・ド・フランス教授、フランス学士院会員、元東京・日仏会館学長）、M. Jacques Gernet（コレージュ・ド・フランス教授、フランス学士院会員）、同上夫人、Mme Caroline Gyss-Vermande（国立科学研究センター研究員）、Mme Isabelle de la Guéronnière（エクス・マルセイユ大学教授）、同上・夫君、Mlle Hing-Foon Kwong（国立科学研究センター研究員）、Mlle Christine Mollier（「道藏研究プロジェクト」



研究員)、M. Jean-Noël Robert (国立科学研究センター研究員)、M. Kristofer Schipper (国立高等研究院第五部門教授、東洋学第一部会・フランス側責任者)、M. Leon Vandermaersch (国立高等研究院第四部門教授、元東京・日仏会館学長)、同上・夫人

### 〔その他の行事〕

- 東方学会主催昼食会  
時 十月三日午後一時  
所 東方学会会議室

三日の日仏会館における開会式・レセプションの後、神田の東方学会において東洋学第一部会の打ち合せ会を兼ねて、東方学会主催の昼食会が催された。護雅夫東方学会理事長・神田信夫同常務理事・柳瀬広事務局長同席のもとで昼食をとり、相互に歓迎の辞と謝辞が応酬された。

- 東洋学第一部会主催レセプション  
時 十月三日午後六時  
所 国際文化会館レセプションホール

東洋学第一部会参加者・在京東洋学研究者・第一部会賛助委員・フランス在日機関代表などおよそ百二十名を招待。榎会長・酒井代表の挨拶に続いて、フランス外務省文化芸術部長 Madame de Cossé-Brissac の挨拶があり乾杯。フランス政府・大使館・日仏会館学長及び理事など各界要人が来会した。尚、三笠宮崇仁殿下は、都合により欠席された。

以上の他に歌舞伎座観劇(十月十日)・サヨナラパーティー(十月十三日)など盛り沢山の第一部会主催の行事が続いた。いずれもフランス側参加者に大きな感銘と満足をあたえたが、その間にも、私的な接待や関連行事などが続き、きわめて密度の濃い交流がなされた。

以上が東洋学第一部会の経過及び会議報告である。これだけの会議が開催出来たのも、文部省・三菱財団・日仏会館を始めとする公的機関や、寺社・企業および個人篤志家の支援があったからである。いま、その一つ一つについて芳名を記し得ないが、ここに厚く御礼を申し上げる次第である。

## 第2部会

.....

### 『中央アジア諸言語文書』

L. Bazin氏を団長とするフランス代表団の一行8名は、10月2日成田に到着。3日の東京日仏会館における合同開会式後、直ちに新幹線で京都へ。京都駅では、ひとあし先に滞洛中の M. Soyumi 夫妻と共に、大地原豊氏ら日本側参加者の出迎えをうけた。そのまま中華料理を囲んでの歓迎会となり、シンポジウムは、先ずはその原義に沿ったところから始まることとなった。翌日午後からの意欲的な発表・討論の概要は次の通りである。

10月4日(火)

#### 開会の辞

羽田 明(当部会日本側代表・京都大学名誉教授)  
\*健康上の理由で欠席のため羽田正氏が代読。  
大地原 豊(京都大学名誉教授)  
Louis BAZIN (パリ第三大学教授)

司会 大地原 豊

発表(1) Colette CAILLAT (パリ第三大学)

#### Notes grammaticales sur les documents kharosthi de Niya.

「今世紀初頭、Stein 卿がタクラマカン砂漠南辺の古跡、Niya から持ち帰ったカロシュティー文書類は、都善王国において3世紀頃用いられた公文書、契約書、報告書の類である。その言語に関しては、大戦直前、T. Burrow の研究が著しい成果を挙げたのであるが、今日から見れば、(1)サンスクリットに沿って解釈し過ぎた嫌いがあり、中期インド語的特性を一層考慮する必要がある、(2)同系の近代インド語であるダルド諸語との比較は、言語の歴史の変遷を明らかにするはずである、と考えられる。

事実このような共時、通時の両視点からの再検討によって、(1)数個の名詞が並置されるとき曲用語尾の省略、(2)指示詞 *ṣa-*, *eta-*, (3)謂わゆる「義務」分詞 *-(i)davo* (sanskrit: *-(i)tavya*)等がより整合的に理解され得る。

地理的には辺境にあるNiyaの中期インド語は、まさにその事実によって他の方言とは異なった発展を見たが故に、インド・アーリヤ語史を決定的に明らかにする場合があるのである。」 (中谷記)

コメント：大地原豊, G.Pinault, Y.Imaeda.

#### 発表(2) Nalini BALBIR (パリ第三大学)

##### A propos du verbe "être" à Niya.

「先の C.Caillat 女史と同じく、Niya 文書の中期インド語を正しく位置づけようとする試み。ここでは語根 BHU- の一語形 huati を検討する。

BHU- とならぶ "être" 動詞 AS- の過去形としては、Niya においても他の prakrit 同様、全ての人称、数を通じて asi のみが使われる。それには、(1) 述部繁辞としてのほか、(2) 義務分詞、または(3) 過去分詞を伴った助動詞としての用法がある。他方、huati の用法も、これとまったく平行関係にあるとみてよい。この事実は、huati が、asi とほぼ等価の過去時称として使用されたことを示唆する。単独の、あるいは助動詞としての種々の使用例もこの推定を支持するものである。

では huati という形をどのように説明すればよいか。Burrow は hoti と bhavati の混淆から生じた現在形と見なし、一見過去と見える用法は、(huati であって) 間接話法に限られると述べる。しかしこれは事実に反する。むしろ hua- は過去分詞 huda- の例外的音韻弱体化形であり、それに当時唯一生きていた動詞語尾、-ti, -ṭi が付されたものと見るべきである。こうして huati は āhati, siyati などと比較しうるのである。」 (中谷記)

コメント：大地原豊, 吉田豊

#### 発表(3) 中谷 英明 (神戸学院大学)

##### Sur la sanskritisation des Canons bouddhiques au Turkestan oriental.

「中央アジア出土の梵文写本の中で最多数を占めるのは、仏典中最古層に属する教訓詩集『ウダーナ・ヴァルガ』の写本である。ペリオがスバシ遺跡で発見した木簡写本(スバシ写本)は、字体、内容の両面から紀元300年頃の筆写と推定され、これらの写本中群を抜いて古い。

この写本の梵語には、後代写本と異なり多量の中期インド語形が混淆するが、正書法、音韻、韻律の分析により、梵語版作者は、正規梵語形を知りつつ韻律を崩さないために俗語形を残したことが判明する。しかもその俗語とは、ガンダーラ語(北西中期インド語)に他ならなかった。

このような事態はどうして結果したか。スバシ伽藍を含む亀茲地方には、4世紀半ばに8寺700人、玄奘の頃に5,000人の僧侶がいたと報告される。しかし羅什の母のエピソードが示すように、おそらくトカラ語を日常語とした亀茲の人々にとって、梵語はもとより、当初の布教言語であったガンダーラ語もまた理解不自由な外国語であり、スバシ写本当時から亀茲出自の僧侶、信者が数を増すにつれ、より明晰で、文化言語としても地位の高い梵語へと、ガンダーラ語仏典を翻訳することになったと考えられる。」 (中谷記)

コメント：C.Caillat, 大地原豊

10月5日(水)

司会 大地原 豊

#### 発表(4) George PINAULT (ミュルーズ大学)

##### Compléments à l'Udanālaṅkāra et à l'Udanastotra en koutchéen.

「ペリオが東トルキスタンから持ち帰ったトカラ語写本は、1911年以来 S.Lévi の研究するところとなった。1926年から1928年まで日仏会館初代館長として滞日し、東京大学でトカラ語を講じた Lévi の仕事は、1933年刊行の4写本研究: Fragments de textes koutchéens として結実した。その後、E.Sieg, W.Thomas が提示した修正点を考慮しつつ、筆者は現在それらの再校訂本を準備中である。

ここではそのうち3点を紹介する。(1) サンスクリットとトカラ語の2文併記の Udanavarga: トカラ訳は韻文ではなく、サンスクリット語順通りの逐語訳である。(2) Udanavarga に対するトカラ語注釈文献 Udanālaṅkāra でも詩節はほぼ逐語訳されるが、韻文であり、複合語は句に置き換えられている。(3) Udanastotra は他に類例の無い文献である。 Udanavarga 33章の各章写経後に記した祈願文と考えられ

るこの韻文は、*Udānavarga* 写本がこの地方に大量に出土する理由を明かすと同時に、仏教的教養に支えられた土着修辞法のあり方を示して興味深い。」

(中谷記)

コメント: J.R.Hamilton, L.Bazin, M.Soywie,  
Ph.Gignoux, 中谷英明

#### 発表(5) 熊本 裕 (東京大学)

##### A Sanskrit-Khotanese Conversation Manual for Central Asian Travelers.

「Stein や Pelliot による大量の写本蒐集を契機として、中央アジア諸言語に関する研究は今日までめざましい発展をとげたが、なかでもコータン語写本 P5538 は、コータン王から敦煌の「大王」宛の公用書簡(日付は彼の治世4年目=970年, KT 2)であるが、その裏面にはサンスクリット・コータン両語による本文(KT 3)が記載されている。この本文は 171 の語及び短文から成り、まずコータン語正書法に基づくサンスクリットで表記され、次にコータン語訳が添えられ、「梵于対照会話便覧」とも云うべく、コータン語研究の鍵を提供する貴重な資料の一つである。

語形並びに正書法の綿密な検討から、(1)コータン語本文の正書法及び言語はおおむね10世紀後半の新コータン語のそれらに一致する。(2)他方、サンスクリット本文は、いくつかのブラークリット語形に加えて、比定できない語形を含むが、これらは想定されるサンスクリット語形との類推に基づいて、該サンスクリット語形に対応するコータン語形から形成されたものであろう。更に、正書法には「話し言葉」としてのサンスクリットの影響が認められる。(3)著者はイラン系コータン人と推定される。」(八木記)

コメント: 大地原豊, C.Caillat, G.Pinault.

#### 発表(6) Philippe GIGNOUX (国立高等研究院)

##### Noms d'ustensiles (argenterie et poterie) en moyen-iranien.

「今日に遺るパルティア、ササン朝期の種々の器には時に銘文が刻されている。発表者は自ら世界中を巡ってこれらの器を調査し、(その中には東京の古代オリエン特博物館も含まれる)、一般的にその

所有者名が記されていることの多い銘刻の中から、器そのものの呼称が書かれている例を拾い出す作業を続けている。本報告では、これら器名を可能な限り文献資料と比較対照させながら一つ一つ意味を確定させ、その語が他言語にどのように借用されていたかをも追求しようとした。

取り上げられたのは銀器としては *makog*, *jam/ja-mag*、ソグド語の *ptγ'δ*、中世ベルシア語 *abzam*, *tast*、パルティア語 *SRQT'*、陶器としては *xumb*、ソグド語の *γwdy*, *tpy*、パルティア語の *spyr/spwd*, *'P(b?r)[n](k)* である。

またこれまで器の呼称と考えられていたが、検討の結果そうではないことが判明した語も2つ挙げられている。」(羽田記)

コメント: 吉田豊、熊本裕

司会 山中 一郎 (京都大学)

#### 発表(7) 羽田 正 (東京大学)

##### Maidān et Bağ. Réflexion à propos de l'urbanisme du Šāh 'Abbās.

「サファヴィー朝第5代の王アッバース I 世 (1587~1629) は、イスファハーンを新首都に定め、一大都市計画によるこの町の大改造を行い、彼の栄光にふさわしい町を作ったと言われる。

本報告で発表者は、アッバースの都市計画について通説を批判し、1、トルコ系遊牧民の生活感覚を有していたアッバースには町の中に入りそこに宮殿を建設して住むという考えは全くなかったこと、2、彼は町の南西にあった水と緑の豊かなバグ(庭園)に滞在し、王の住処であるこのバグを中心に「都市計画」がなされたこと、3、メイダーンは既にバグの傍に騎馬訓練用として存在していたものを活用したため、後にこれに接して建てられたモスクとは建築上の軸線が合わないこと、4、このような「都市外都市」のパターンはアッバースのイスファハーンが最初ではなく、モンゴル時代以降遊牧民の支配したイラン文化圏にしばしば見られること、などをベルシア語史料を根拠に指摘した。」(羽田記)

コメント: Ph.Gignoux, L.Bazin, 浜田正美, 大地原豊

発表(8) 浜田 正美 (法政大学)

Aperçu des manuscrits Chagatay(Turki) provenant du Turkestan oriental.

「16世紀より今世紀初頭に至る間の東トルキスタンの書写語は、時には方言的要素も交えたチャグタイ語であった。19世紀末葉以来、収集が開始されたにもかかわらず、この言語により記された写本・文書に関する研究は十分に進展したとは言い難い。

コレクションについて。最大のコレクションを有するのは新疆博物館であるが、その全貌は依然不明。北京の民族研究所のコレクションについても詳しい内容に関する報告は無い。中国以外では、ソ連の東洋学研究所、レニングラード支部が千点近い写本を擁し、スウェーデンのルンド大学には、G.Jarring 大使の収集になる400点ほどが存在する。この他、フランス学士院、大英図書館、インド省図書館等が主たる所蔵機関であるが、現在までに収集されている写本・文書は数千点を越えないと思われる。

内容について。現在まで知られている文書は極めて僅かである。写本中最も数の多いものは、各種の祈禱集である。又、日常の使用に供されていた写本としては、所謂「同業組合の書」や魔術師の為の手引書、医書、占書などが数えられる。具体的な日常の使用目的を持たぬ写本には、狭義の歴史書、聖者伝、文学作品があるが、なかでも聖者伝は数的に歴史書を圧しており、歴史研究もこれを無視することは出来ない。」

(浜田記)

コメント: L. Bazin, 大地原豊, 堀直

10月6日(木)

司会 浜田 正美

発表(9) 吉田 豊 (神戸市外国語大学)

Some new readings of the Kara Balgasun inscription.

「カラバルガスン碑文はウイグルの第8代保義可汗(A.D.808-821)を称えるために建てられた3言語(ウイグル・ソグド・漢語)併用碑文である。そのうちのソグド語版の研究は Müllerによって始められ、Hansen (1930)が全体の解説を発表した。

今回、現在のソグド語学の知識をもって Hansenの

解説の改善を試みた結果、新たにFragments 7,8の相対的位置を決定できた。また漢文版からは知られていなかった、「大食の国」、「ホラーサーンのアミール」、「カリフ」などの語が読みとられ、ウイグルが9世紀の初め頃に、イスラム勢力と衝突していたことが明かになった。これ以外に、碑文のソグド語にみられるトルコ語の透写表現を指摘し、またマニ教に関わる部分にも言及した。

なお、京大文学部東洋史学科のご好意により、同学科が所蔵する貴重な拓本が発表会場に展示されたため、直接拓本によって議論することができた。」

(吉田記)

コメント: 大地原豊, J.R. Hamilton

発表(10) James R. HAMILTON (CNRS)

L'inscription trilingue de Qara Balgasun d'après les estampages de Bouillane de Lacoste.

「これは吉田氏の発表と同じカラバルガスン碑文を扱ったものである。Hamilton氏は、1909年にB. de Lacoste がモンゴリアで採って来た同碑文の拓本がパリにあることに気付き、1958年より再解説テキストの出版を準備してきたが、諸般の事情により未だ果たせずにいた。ところが今回のコロックにおいて吉田氏が上記の発表をすると事前に知り、再びこの研究に意欲を燃やされたとのことである。

発表自体は研究史と漢文面の数個の字句の新説を紹介された(その中には吉田氏が独立に見出したものもある)にとどまるが、パリの拓本は、京大文学部や北京図書館のもの(後者は森安が実見)のような墨を使ったものでなく、湿った紙を文字の凹みに押し込んで採ったものなので、より正確な情報を多く含むと期待される。学界のために、一日も早く、全文の新説テキスト(ソグド語面は Sims-Williams氏と合作)を公刊されるよう祈ってやまない。」

(森安記)

コメント: 大地原豊, 森安孝夫, L. Bazin, Ph. Gignoux.

発表(11) Louis BAZIN (パリ第3大学)

L'inscription kirghize de Suji (Essai d'une nouvelle lecture).

「1913年に発表された G.J.Ramstedt のスージ碑文に関する研究は、当時としては優れたものであり、その見解は Orkun や Malov に殆どそのまま引き継がれて来たが、その翻訳に関しては若干の問題が存在する。Ramstedt 以下が、Yaglaqar-Qan-Ata と読み、この墓誌の主人公の名であると見做した部分の ata は、実は動詞 at- の gérondif であり、第一行は、「ウイグルの国から、我は Yaglaqar Qan を追ひ払って来た」と読むべきである。第7行の: *m R m a* : は従来 *marima* と読まれ、「吾が師(マニ教の Mar)に」と解されて来たが、キルギズがマニ教(もしくはキリスト教)を受容していたとする他の史料は皆無である。この語はむしろ *amirima* と読まれるべきで、*amir* という語自体は、古代トルコ語中に確認されていないが、その派生語 *amir-t-gur* はマニ教ウイグルテキスト中に発見されている。一方モンゴル語における *amur* の存在は、*amir/amur* がトルコとモンゴルの二つの言語グループに共通の古い語彙のひとつであったことを示している。Mos-taert のオールドス方言辞書は、この語に「平和・平穩・健康で」等の意味を与えており、*amirima* は、結局「私が健康であったとき」すなわち「私の生存中に」と解するべきである。

840年キルギズがウイグルを撃破したとき、ウイグルのカガンはヤグラカルではなくエデイズ氏族の出身であった。が、キルギズ侵入の後、ヤグラカルの首領たちが小規模な部族連合体を再建したことが知られている。スージ碑文の主人公が「ウイグルの国から」追ひ払ったヤグラカル・カンはこうした首領の一人であったのであろう。具体的には Qarasahr を根拠地とした Meuglig ではないかと思われる。そうであれば、中国史料から判断し、碑文は856年以降9世紀末までに建てられたとかがえられる」

(浜田記)

コメント: 大地原豊, 浜田正美, 森安孝夫, J.R. Hamilton.

発表(12) 森安 孝夫 (大阪大学)

Les sources du bouddhisme turc et l'apparition des Canons bouddhiques en turc ancien.

「トルコ学界では長らく、古トルコ語文獻(8-14世紀)間に見られる言語差は方言差とみなされてきたが、最近では時代差とみなす説が有力になってきた。発表者はウイグル文字の末位の *-q/-r* の形の違い(尻尾の長短)に着目するという新視点を加えつつ、この説を補強した。

次に古代トルコ(テュルク)仏教の源流はソグド仏教にありとする最近の説 'sogdische Hypothese' を取り上げ、これを言語学と歴史学の両面から批判した。古層のトルコ語仏典に現れるインド来源借用語彙中に「ソグド語仲介形式」が目立つという現象を、'sogdische Hypothese' ではソグド仏教→トルコ仏教の流れがあったからと単純に想定するが、実はそうではなく、ソグド・マニ教→トルコ・マニ教→トルコ仏教という流れの中で解釈すべきである(言語面)。その他の様々の事象も、トルコ人に大きな文化的影響を与えたソグド人は、仏教徒ではなくマニ教徒であったとみて初めて、歴史的にも言語的にもうまく説明できるのである。トルコ仏教の源流はソグド仏教ではなく、トカラ仏教ないし中国仏教とみるべきなのである。

本発表をより詳しくした日本語論文が既に「史学雑誌」98-4に掲載された。」 (森安記)

コメント: 浜田正美, 大地原豊, J.R. Hamilton, L. Bazin.

発表(13) 百濟 康義 (龍谷大学)

Pelliot ouigour n.218: its significance.

「世界各地に分散した「敦煌出土」と伝えられる資料のうちには、明らかに13-14世紀に作成されたと考えられるウイグル字の写本・版本の断片が見出される。ストックホルムの民族学博物館や、京都の藤井有隣館および羽田亨写真資料に蔵される資料がそれである。だが、これらの資料は、敦煌出土とは言っても、11世紀前半に封洞された彼の有名な蔵経洞(現在の第17窟)に由来するものではない。では、敦煌の何処から出土したものか。

森安孝夫氏は、パリの国立図書館に"Pelliot ouigour: Grotte 181"として蔵される363点の断片の存在を初めて報告し、目録学的研究を発表した(『講座敦煌』6巻1985年)。その中の一片"Pelliot ouigour 218"は『別訳雑阿含経』の抄訳であることが判明した。ところがこの断片は、ストックホルム

10月7日(金)

司会 御牧 克己(京都大学)

発表(15) 上山 大峻(龍谷大学)

Le cocile du Tibet: nouvelles perspectives.

「(1)チベット宗論の年代について: チベット宗論の敦煌出土資料『頓悟大乘正理決』(P.ch.4646)に見る「当沙州降下之日。奉贊普恩命。遠追令開示禪門」の記事のうち、「沙州降下之日」は786年を妥当とする。この時、敦煌在住の摩訶衍に吐蕃贊普より質問が寄せられると同時に、曇曠にも22項目の佛教教理に関する質問が寄せられたと推定する。

同資料の「首自申年。我大師忽奉明詔日。婆羅門僧等奏言。漢僧所教授。頓悟禪宗。並非金口所說。請即停廢」の文を、従来は「首め申年、我が大師、忽ちに明詔を奉ず。曰く、……」と読み、申年を禪宗停廢の勅令発布の時と見たが、これは「首め申年、我が大師、忽ちに明詔を奉ずるの日より、婆羅門僧等奏言すらく、……」と読むべきで、申年は淨域で贊普の命を受け摩訶衍が禪宗を説いたときを指す。

(2)『頓悟大乘正理決』の新資料: 『頓悟大乘正理決』(P.ch.4646)に一部一致する異本P. 4623(首尾欠、卷子型)をペリオ蒐集中に発見した。この写本全250行のうち後半の133-250行の部分が『頓悟大乘正理決』のF145b3~148b4に一致する。その前の部分は、やはり宗論に関係する新しい資料である。」(上山記)

コメント: Y. Imaeda, 御牧克己

発表(16) Yoshiro IMAEDA (CNRS)

Le corpus des manuscrits tibétains de Touen-houang.

「ロンドン及びパリに保存されている数千に及ぶ敦煌チベット文書の、チベット研究にとっての重要性は改めて述べるまでもない。その内最も代表的かつ重要な168点がフランス国立図書館によって影印出版(640枚、2冊)されている。

しかしながら、これら敦煌文書及び同時代の碑文チベット語は、標準古典チベット語とは大きく趣を異にしており、まだ意味不明の用語等も数多く残さ

に蔵される同経の写本4葉と、もともと同一本に属する雜片であると知れた。こうした関連でみてゆくと、ストックホルムと京都に蔵されるウイグル訳『雜阿含經』『中阿含經』『增一阿含經』『妙法蓮華經玄贊』『阿毘達磨俱舍論』『阿毘達磨順正理論』『入阿毘達磨論・註』などの断片も相互に関係しあっており、それらの出所を同一箇所求めざるを得なくなった。

こうした意味で、「Pelliot ouigour 218」は、ストックホルムと京都に蔵される当該資料の出所を探る鍵となるもので、きわめて重要である。共通の出所とは、ペリオ教授が「Grotte 181」と呼んだ洞窟、すなわち現在の464窟以外には考えられない。

この小発表に加筆し、ウイグル語本文の転写・注釈・図版を添えた論文を、「ウイグル訳『別訳雜阿含經』断片 - "Pelliot ouigour 218"の意味すること - 」と題して、『仏教学研究』45号に投稿した。併せて参照ねがえれば幸せである。」(百濟記)

コメント: 御牧克己, L. Bazin.

発表(14) 梅村 坦(立正大学)

Uyghur manuscripts preserved in the People's Republic of China.

「現在では新たに古ウイグル文書(古トルコ語文獻)を出土する可能性のある国は中華人民共和国のみである。発表者は1987-1988年の約1年間、中国に滞在し、各地に散在するウイグル文書を直接調査し、またウイグル人・漢人を含む現地の研究者とも交流する機会に恵まれた。

そこで今回は、特に重要な歴史博物館(北京)、新疆ウイグル自治区博物館(ウルムチ)、吐蕃番文管所(トゥルファン)に所蔵されるウイグル文書の概要を紹介し、あわせて中国人研究者の関連業績目録を網羅的に付す。

さらに1974年にトゥルファンのベゼクリクより出土したウイグル文章書体の一文書(墨印あり)を取り上げ、その解説の試案を提示してみせた(このみウルムチのDolukun氏および森安との合作)。この文書は刺繍された仏像7件の寄進あるいは売買に関わるものである。」(森安記)

コメント: J.R. Hamilton, 百濟康義

れている。

それ故に、影印出版された文書の内、更に重要な歴史関係文書11点をコンピューター（東京外大AA研の日立 M-640/20 機）により処理し、その全音節（約三万）をアルファベット順に配列した単音節集を準備中で、武内（京都）・今枝（パリ）がその読みを担当している。

この単音節集は、その機械的網羅性の故に古代チベット語の文脈・語彙の分析・理解に非常に有益なものとなるであろう。」（今枝記）

コメント：M.Soymié, 大地原豊, G.Gagnon.

発表(17) 武内 紹人（京都教育大学）

On the Tibetan Texts in the Otani Collection.

「大谷探検隊が持ち帰り現在龍谷大学に保管されている中央アジア出土文書のなかには70点余りのチベット文書が含まれている。そのほとんどが小さな断片で解説が困難なためこれまで組織的な研究はおこなわれなかった。一昨年来龍谷大学の上山大峻教授を長とする研究班が組織され、調査の結果がほぼ判明してきたので、私が担当した俗文書を中心に大谷チベット文書の概要を主要な文書の解説内容と年代を中心に解説した。

俗文書としては、手紙と契約文書が中心で、占いとおぼしきものが一点。仏教文書としては、poti数点と法身偈(Ye dharma gāthā)の木版40点余。バクバ文字文書一点についても解説をくわえた。

出土地は必ずしも明確ではないが、トルファン盆地の可能性が高く、ベルリンコレクションと共に、貴重なトルファン出土チベット文書群である。今後西コレクションの文書を併せ研究することによって、トルファン出土チベット文書の性格をあきらかにし、歴史・仏教資料として活用できるようにしたい。」

（武内記）

コメント：吉田豊, 百済康義, 高田時雄, Y.Imaeda, 御牧克己, 梶山雄一, 森安孝夫

司会 興膳 宏（京都大学）

発表(18) 矢野 道雄（京都産業大学）

A note on Ptolemy in China.

「唐代以後の史書に書名のみが記録されている「都利経」「聿斯経」「四門経」が占星術に関わるものであることは、かつてシャヴァンヌとベリオによって指摘されていたが、その起源は明かではなかった。石田幹之助はこれらおよび「都利聿斯経」「聿斯経四門経」がインド起源であると推測した。桃裕之は日本の宿曜勅文に引用をされているこれらの書物の断片を集め、その占星術的な内容がギリシア起源であると指摘した。また藪内清は「四門経」とブトレマイオスの「テトラビプロス」との関係を推測した。これらの研究をふまえ、さらにアラビア語写本などに見られる表記を参照し、矢野は「都利聿斯」が人名Ptolemaiosの音訳に由来するという可能性を初めて指摘した。」（矢野記）

コメント：徳永宗雄, 大地原豊, 尾崎雄二郎, 高田時雄, 吉田豊, G.Gagnon, 興膳宏

発表(19) 高田 時雄（京都大学）

Notations de prononciation à l'aide de la méthode zhiyin(直音) à Dunhuang

「佛典などの書物から難字を拾い出して、反切によらず直音で音注を附した写本が、敦煌文書中に相当数見いだせる。これらの写本は初学の徒が読書の際の備忘用に作成したものと想像される。多くが十世紀の帰義軍後期のもので、音注に反映される音もいわゆる河西方言のそれである。したがってこれらは音韻資料としても、もちろん重要なものであるに違いないが、また一方で敦煌の言語生活に関する貴重な情報を与えてもくれる。それは、帰義軍後期になると、敦煌では読書に方言音を用い始めたという事実である。また佛音の規範を与える「一切経音義」の反切も河西音で読み換えていたらしいことも分かる。吐蕃期及び帰義軍初期にはなお唐代標準音たる長安音が佛典讀誦に用いられていたことが分かっているが、ここでは独立国家としての帰義軍政権下の実状に即して言語面でも規範の変化が起こったものと考えてよい。」（高田記）

コメント：L.Bazin, M.Soymié, 尾崎雄二郎, 中谷英明, 大地原豊

10月8日(土)

司会 興膳 宏

発表(20) 池田 温(東京大学)

Aperçu général des manuscrits chinois de la collection Ôtani.

「大谷光瑞指導の3回の中垂探検(1902-14)将来品の研究は、『西域考古図譜』(1915)に代表される初期、『西域文化研究』全6冊(1958-63)に集約された戦後期、及び『西域出土仏典の研究』(1980)『大谷文書集成(言)』(1984)に始まる近年の三段階をへて展開した。

漢文文献は写経、一般の典籍及び文書類に三大別される。橋と吉川の将来した敦煌写経(『橋目』429軸、吉川将来百余巻)の大半は、旅順博をへて今日北京図書館に所蔵される(『劫統』収412件)外、龍大に37点ある。亀茲と吐魯番出土写経は『図譜』に95片収録されるが、龍大7点、京博5点、大谷家1点の他は現在所在不詳。『図譜』未収の再編は多く吐魯番出土、龍大に約千片ある。一般典籍は、仏典紙背の『本草集註』1巻を除き、すべて零細な断片であり、『図譜』所収廿数片と橋資料を含め数十点龍大現蔵。十六国期写『孫子』旧注以外は大体唐代に属し、経史子集各部にわたり存在する。

文書類は吐魯番盆地のアスタナ、カラホジャ両古墳群から発掘された4~5千片を主体とし、亀茲地方39片、楼蘭数十片(4世紀)、和闐4片を算える。年代は7~8世紀を主とし、元代、清末を僅か含む。衣物疏、刻身等の埋葬文書以外は、殆ど二次利用された官文書のほごが多く、契約、書簡等を小例混えている。近年中国で吐魯番文書が大量に発掘整理され、大谷文書と一聯の物も次々と見付かり、その性格もようやく明かとなりつつある。」(池田記)

コメント: 藤枝晃、森安孝夫

発表(21) Michel SOYMIÉ(国立高等研究院)

La datation des manuscrits chinois.

「敦煌・トルファン文書の研究において、紀年をもたない写本の年代をいかに決定するかは最も基礎的な問題の一つである。そのための方法に内的徴証によるものと外的徴証によるものの二つがある。内

的徴証とは対象とするテキストに現れる人名・地名・佛寺名・称号のほか、制度・慣習・事件への言及などに手掛かりを求めるもので、これまでも有効に用いられてきた。今後その拡大といっそう厳密な適用が望まれる。

写本学(codicologie)と古文書学(paleographie)という二つの方法も重要である。両者をあわせて外的徴証と呼ぼう。とくに前者は藤枝晃氏により開拓され、現在フランスのJ.-P. Drège氏により精力的に押し進められている比較的新しい手法で、紙の大きさ・厚さ・すき目・素材・色などの比較によって客観的な年代決定をおこなおうとするもの。現在確実に進展しつつある。後者は文字の面から年代を決定する手法であるが、単に書体・書風の違ではなく、文字の構造的変遷を辿ることによって一層有効な年代決定の方法を確立し得るであろう。」(高田記)

コメント: 興膳宏

シンポジウムを終えて

今回の東洋学第2部会は、1986年秋、大地原先生が羽田先生に、「中央アジア出土写本」に関する部会設置構想を提案された日に始まったといえる。両先生は同年11月18日付けで、榎日仏東洋学会会長宛に試案を提出された。この試案に沿って、関西在住のanciens boursiersが中心となり、計8回の準備会を通じて、計画は実行に移されていった(準備会開催は、1987年1月11日、5月24日、9月27日、12月22日、1988年4月11日、4月30日、7月30日、9月15日)。この間、様々の援助を惜しまれなかった竺沙雅章、藤枝晃両先生に謝意を表したい。また準備費及びフランス代表団の招聘、滞在費に対し、文部省、日本学術振興会、三島海雲記念財団から補助金を交付された。

関西日仏学館のM. Wasserman館長は、会議が半ばにさしかかった10月6日(木)の夕刻に、参加者全員を館長室におけるレセプションにお招き下さった。心からのおもてなしに対して深くお礼申し上げる。

また最終日の会議場、懇親会場をお貸し下さり、大谷コレクションの展覧に招待下さった龍谷大学の諸先生方にも厚くお礼申し上げる。



\* \* \*

この会議は、各分野の具体的な成果はもちろんのこと、発表の過半と、討論の大半をフランス語で行い得たことの意義も大変大きかったと思われる。この点に関しては、終始積極的な発言で議論を喚起された大地原豊氏に負うところが大きであった。

その成果は、文部省研究成果公開促進費の交付を受けて、1990年1月に京都・同朋舎から出版の予定である (Documents et archives provenant de l'Asie Centrale: Actes du Colloque Franco-Japonais de Kyoto (4 - 8 octobre '88), Dohōsha (Kyoto), 1990.)。

また日仏の若手研究者の親密な交流の機会ともなったことは、今後の明るい展望を約するものであろう。事実、Louis Bazin 教授からは、'91年のフランスにおける第6回会議の企画準備が始まり、再び「中央アジア写本」を主題の一つとしたい旨が来信している。羽田明先生からも次回こそ諸君と共に参加したい、という手紙を頂いた。この分野における交流が、今後益々盛んになることを祈る。(H.N.)

## 第4回日仏学術セミナー

### 『宗教とアジア社会： 民間信仰とアジア社会』

パリ第7大学主催の第4回日仏学術セミナーは、日本学術振興会の後援を得て、1989年10月2日から4日までパリで開催された。この会議の詳しい報告は、次号の通信に石沢良昭氏から頂くことになっているので、ここにはその参加者名のみを速報する。(名前は発表順)

日本側参加者：石沢良昭(上智大学)、矢澤利彦(埼玉大学)、加藤栄一(東京大学)、寺田勇文(上智大学)

フランス側参加者：Leon VANDERMEERSCH (EPHE V' section), Georges BOUDAREL (Paris VII), NGUYEN THE ANH (C.N.R.S.), Kristofer SCHIPPER (EPHE V' section), Jean-Pierre BERTHON (C.N.R.

S.), Bernard GAY (C.N.R.S.), Pierre-Bernard LAFONT (EPHE IV' section), Alain FOREST (C.N.R.S.).

## フランス人学者の来日

Michel SOYMIÉ 氏 (国立高等研究院)

スワミエ氏は、京都大学後援会の招聘(受け入れ責任者・興膳宏)で昭和63年9月20日から2カ月間京都に滞在された。上記の日仏シンポジウム第2部会に参加されたほか、次の講演を行われた。

日時・1988年10月29日(土)午後2時より

演題・「いくつかの敦煌文献による後期道教の諸相」(Certains aspects du taoïsme tardif - d'après quelques documents de Dun-huang manuscrits) (日本語)

主催・京都大学文学部 中国語学中国文学研究室  
京都大学文学部 東洋史学研究室

場所・京都大学文学部会議室

上記講演は、整理の上、『中国文学報』第40冊(1989年10月発行予定)に掲載。(興膳宏)

Gérard FUSSMAN 氏 (コレージュ・ド・フランス)

(Chaire d'histoire du monde indien) は、日本学術振興会の短期外国人招聘研究者として京都大学人文科学研究所共同研究班「4-8世紀の北西インドと中央アジア」に招聘された。受入者は同所教授桑山正進。4月3日に大阪着後、京都市左京区聖護院の国際学生の家 Haus der Begegnung に宿泊。同上共同研究班において次の三回にわたる連続講義をおこなった。

1. The Road to China through Gilgit and Hunza. (4月10日)
2. Inscriptions of Shattial and Chilas. (4月17日)
3. Inscriptions of Alam Bridge and Hunza. (4月24日)

なお、滞在期間中の公開講演は次のとおりであっ

た。

1. Surkh Kotal and the Kushans. (4月15日、京都大学文学部・日仏東洋学会共催、於京大楽友会館。)

2. Unexcavated Buddhist Monuments around Kabul (Afghanistan). (4月22日、京都大学人文科学研究所主催、於京都大学人文科学研究所大会議室)

さらに4月26日から帰国途上東京に立ちよられ、以下の講義・公開講演をおこなって精力的な日程をこなされ、5月2日に東京より帰国。

1. Unpublished Middle Indic Inscriptions from Mathura. (東京大学文学部、4月26日)

2. The Road to China through Gilgit and Hunza. (国際佛教学研究、4月27日)

3. La route d'Inde en Chine par Gilgit et Hunza. (東京日仏会館、4月28日。日仏会館、東方学会、日仏東洋学会共催。通訳中谷英明)

(桑山正進)

## 会員消息

### ○会員の渡仏

山中一郎幹事は、Institut de Paléontologie Humaine (1, rue René Panhard, 75013 Paris)で教鞭をとるため、9月10日渡仏された。2年間の予定。連絡は上記 Institut まで。

### ○新入会員 (平成元年前期)

服部正明

(大阪学院大学教授、京都大学名誉教授、インド思想史)

梶山雄一

(仏教大学教授、京都大学名誉教授、インド大乘仏教思想史)

桑山正進

(京都大学教授、中央アジア考古学)

矢野道雄

(京都産業大学教授、インド学・科学史)

徳永宗雄

(京都大学助教授、リグ・ヴェーダ解釈論)

白杉悦雄

(京都大学大学院、中国医学思想)

### ○住所及び所属の変更

羽田正

(東京大学東洋文化研究所助教授)

松島英子

(中近東文化センター研究員)

### ○退会者

高田修、土田健次郎、谷田孝之の各氏。

### ○訃報

中国法制史専攻の内田智雄氏(83歳)は本年10月3日逝去された。

## 昭和63年度会員総会報告

昭和63年度会員総会は、年が明けた平成元年3月30日(木)、京都東一条の関西日仏学館において行われた。東京方面から遠路おいで願った、榎会長、福井主幹をはじめとする6名の方々を含め、15名の出席があった。このほかオブザーバー参加された4名の方々は、総会后当学会の会員となられた。

総会に先立ち、午後3時より学館1階4号室で評議員会を行った。出席者は、榎、福井、興膳、坂出、山中、御牧、前田、田中(文)、中谷の各評議員。役員改選など多くの議題に予定を超過し、4時10分に終了。ただちに稲畑ホールでの総会に移った。総会は御牧幹事の総合司会により次のように進行した。

1. 開会の辞 榎一雄会長

2. 総会議事(議長 興膳評議員)

#### A. 審議事項

(1) 会則変更

改められた3条の新条文は次の通り。

第4条 本会の本部は日仏会館におき、事務局は代表幹事の所属する機関内におく。

第8条 評議員会はそのうちから次の役員を選ぶ。会長1名、代表幹事1名、幹事若干名、会

# 会 計 報 告

## 日 仏 東 洋 学 会 昭 和 63 年 度 会 計 決 算 報 告

収 入	普通会員会費	3 0 0 , 0 0 0
	前年度繰越金	8 1 , 7 0 3
	日仏会館補助金	4 0 , 0 0 0
	利息	1 , 7 9 3
	計	4 2 2 , 8 6 6
支 出	印刷費 (1)『通信』印刷	6 0 , 1 5 0
	(2)会員名簿印刷	5 0 , 0 0 0
	通信費	5 6 , 8 8 0
	会議費	3 0 , 5 3 0
	消耗品費	1 8 , 6 5 0
	支払報酬費	2 0 , 0 0 0
	雑費	4 4 , 4 0 0
	計	2 8 0 , 6 1 0
残 金	収入 - 支出 =	1 4 2 , 2 5 6

昭和63年度残金142,256円は、平成元年度への繰越金とする。  
上記のごとく相違ありません。

平成元年3月10日

日 仏 東 洋 学 会 会 計 監 事

池 田 温

日 仏 東 洋 学 会 会 計 監 事

原 実

## 日 仏 東 洋 学 会 平 成 元 年 度 会 計 予 算

収 入	普通会員会費	3 0 0 , 0 0 0
	前年度繰越金	1 4 2 , 2 5 6
	日仏会館補助金	4 0 , 0 0 0
	計	4 8 2 , 2 5 6
支 出	印刷費	2 0 0 , 0 0 0
	通信費	6 0 , 0 0 0
	会議費	3 0 , 0 0 0
	消耗品費	3 0 , 0 0 0
	支払報酬費	2 0 , 0 0 0
	雑費	4 2 , 2 5 6
	予備費	1 0 0 , 0 0 0
	計	4 8 2 , 2 5 6

計幹事1名、監事2名。

…。会員総会はその他にも若干名の名誉会長ならびに顧問を推薦することができる。

第13条 以上の1条から12条までの規定は、1989年4月1日から発効するものとする。

## (2) 役員改選

事務局の実務を関西部会に移行させることなどに伴い、次の方々が新しく補充選出された。

名誉会長 WASSERMAN, Michel

顧問 藤枝晃、大地原豊

評議員 狩野直禎、高田時雄、羽田正、八木徹

幹事 高田時雄、八木徹、中谷英明

監事 興膳宏

会計幹事 羽田正

また次の方々がその役を退かれることになった。

評議員 酒井忠夫、江上波夫、市古貞次、井筒俊彦、大地原豊

幹事 森安孝夫

監事 池田温

会計幹事 田中文雄

## (3) 会計報告

田中文雄会計幹事より、昭和63年度決算報告、および平成元年度予算案の説明あり、承認。別表参照のこと。

## (4) 推薦委員会の創設

日仏交換研究員の推薦や、日仏共同研究事業の審議にあたるため委員会を創設する。委員には次の6名が選出された。

山本達郎名誉会長、羽田明名誉会長、榎一雄会長、福井文雅代表幹事、興膳宏評議員、池田温評議員

## (5) Gérard Fussman コレージュ・ド・フランス教授講演会の共催

Fussman教授は、京都大学人文科学研究所桑山正進教授の招きによって、4月3日から1カ月間、滞日する予定。日仏東洋学会は、4月28日、東京日仏会館での同教授の講演会を、日仏会館、東方学会と共に共催することが決定された。

(ここで同教授の滞日日程の詳細をオブザーバー桑山氏が説明。その報告はこの『通信』の「フランス人学者の来日」の項参照のこと。)

## B. 報告事項

(1) 第6回(1989年度)渋沢・クローデル賞の公募  
日仏会館の創立60周年を記念して1984年に設けられた渋沢・クローデル賞(日仏会館・毎日新聞共催)は、日仏両国で相手国の文化の研究または紹介に顕著な業績のあった少壮研究者(42才以下)に与えられる。昭和64年1月から平成元年12月に発表された業績を日仏会館まで応募または推薦下さるよう。締切は平成2年3月31日。

## (2) 第5回日仏学術シンポジウムの報告

第1部会「日・中宗教文化の交流」

第2部会「中央アジア諸言語文書」

第1部会は福井主幹、第2部会の中谷幹事より報告。両部会とも高水準の発表と熱心な討論に終始したのみならず、親密な人的関係を築くことができ、大きな成果があった(詳細はこの『通信』の「日仏学術シンポジウム開かれる」の項参照)。

## 3. 閉会の辞

榎一雄会長

総会終了後、オブザーバー参加の服部正明、桑山正進、矢野道雄、白杉悦雄の4氏は、当学会会員とられた。引続き稲畑ホールでのカクテルは、遅れて参加された H. Durt 氏共々、出席者の歓談かはずんだ。

会場を準備し、またカクテルを主催下さった Michel Wasserman 関西日仏学館館長に対して、厚く御礼申し上げる。(文責中谷英明)

## 編集後記

今回の第十号から、関西部会で『通信』の編集を担当することになりました。東京在住の一部の会員に過度に負担がかかりがちだった状況を少しでも改善し、できるだけ多数の会員の幅広い参加を得て学会の運営に当たるとの方針から、このような措置がとられるに至ったものです。日仏東洋学会の再発足以来、『通信』の発行のために尽力してこられた方々、とりわけその中心となって大きな役割を担われた福井文雅氏に対し、この場を借りて心からの謝意を申し述べたいと思います。

改めて申すまでもなく、『通信』は当学会の任務

を遂行するための骨幹ともいうべき、重要な位置を占めています。編集担当者が総入れ替えとなった今回を機として、これまでの成果を十分に受け継ぎつつ、会員相互の間をつなぐ機関誌として何をなすべきか、何がなせるかということを実際に考えてゆくつもりです。これまでに提起されている具体的なプランとしては、人の往来を主とした日仏学術交流動向の紹介、各関係学界の近況紹介、新刊紹介、新しくフランスを訪れた人によるエッセイ等があります。また目標としては、年二回の刊行をぜひ実現したいと願っています。要はこの『通信』を、会員一人一人が身近な存在として意識していただけるようなものに育てあげたいというに尽きるでしょう。

とはいいながら、我々編集の任に当たる者にとっては、すべてがまだ未経験なことばかりで、意気ごみとは裏腹に、大きな不安を抱えていることもまた事実です。『通信』がほんとうの意味で有意義な作用を果たすためには、何といたっても会員各位の協力をいただくことが欠かせません。どうか機会あるごとに、積極的にご意見・ご希望等をお寄せ下さるよう、編集担当者一同切に願っています。

(H.K.)

皆様いかがお過ごしですか。紅葉もたけなわの季節に、関西部会が初めて編集した『通信』をお届けします。何しろ慣れないことで、編集委員が一丸となって作りましたが、さて出来上りは気に入って頂けたでしょうか。おおい改善して参りますので、宜しく願い申し上げます。

目標だけは高く掲げたいと思っています。多岐にわたる「東洋学」の、人為的、あるいは自然的な諸々の枠組みを越えた情報交換の場となり、兼ねて会員の親睦も計れるような、開かれて風通しの良い小誌を作ってゆきたい、また『通信』の活用によって、1955年、Louis Renou、石田幹之助、辻直四郎らによって設立されて以来の、伝統ある本学会の活動を一層充実させたい、と希っています。会員各位のご支援を切にお願いする次第です。

\*\*\*

種々の事情により、紙面をいくつかの点で変更しました。

今までの活版印刷はオフセットに改めました。これは費用節約の効用もありますが、主として執筆・編集に、広く多くの人に参加願うためです。ワープロで打ち出した原稿をそのまま印刷に付しますので、多少のページ数増によっても費用に大差無く、気兼ねなく長い記事もお寄せ頂けます。また自分で入力して下されば、校正の手間もいりません。印刷期間も大幅に縮減します。こうしたメリットがありますので、字の若干の不鮮明はしばしご容赦をお願いします。またこれに伴い、縦書きを横書きに改めました。

表紙の題字は、元の趙孟頫の六体千字文から、高田時雄氏に集字いただきました。また表紙カットは、13世紀イランの陶器碗の模様にもとづき、桑山正進氏が自ら描き起こして下さったものです。両氏にお礼を申し述べたいと思います。

\*\*\*

次号の配布は来年3月の予定です。まだ具体的な企画はありませんので、どのような情報・記事でも、提案・企画でも、編集委員（興膳、御牧、山中、浜田、高田、羽田正、八木、中谷）まで持ち込んで下さい\*。学界や個人の消息、新刊書や会員の出版物の紹介、学界回顧、フランス事情、エッセイ等々ふらつてお寄せ下されば有難く思います。

\*NECのPC-98を用い、以下の設定の「一太郎」(ver.3)で入力した3.5インチフロッピーを送っていただければ最も助かります。

用紙サイズ	: A4	1行文字数	: 46
1ページ行数	: 41	上端マージン	: 23
下端マージン	: 27	左端マージン	: 32
右端マージン	: 90		

弁別記号など、一太郎にのらないものを多く含む場合は、むしろ打ち出して、記号を手書きした原稿を送っていただいた方が便利です。

なお手書き原稿は、当方で入力させていただきますので、お近くにパソコンの便宜が無い場合も、ご心配なくお送り下さい。(H.N.)

## 榎一雄会長 急逝

新聞に報じられました通り、本学会会長の榎一雄氏は、11月5日、虚血性心不全のため亡くなりました。75歳でした。春の総会の折には元気なお姿を拝見しただけに一同驚いています。ご冥福をお祈りします。

---

### 第6回日仏シンポジウムの 開催について

1991年秋にフランスで開催される第6回日仏学術シンポジウム（VI<sup>e</sup> Colloque Scientifique Franco-Japonais）に関し、秋山光和日仏会館学術委員会委員長より、次の旨の通知がありましたのでお知らせします。

1) 部門別シンポジウムを組織し、これに参加する計画をお持ちの方は、至急にフランス側責任者と連絡の上、先方における受け入れの可能性などを検討すること。

2) 準備状況を12月9日（土）までに日仏会館日本事務所に文書によって報告すること。

3) これにもとづき、12月12日（火）18時よりの関連学会連絡協議会において協議の上、明年4月中に学術委員会において参加部門を決定する。

4) 以上の日程は、日本からの参加者派遣費の補助金申請締切を考慮したものである。以上。

---

日 仏 東 洋 学 会 通 信 第 1 0 号  
1989 (平成元) 年 11 月 9 日 発行

編集兼 日 仏 東 洋 学 会

発行者 本部：〒101 東京都千代田区神田駿河台2-3 日仏会館気付

発行所 〒673 神戸市西区伊川谷 神戸学院大学 中谷英明研究室  
Tel. 078.974.1551.

印刷所 六稜舎 (大阪)

---